

「主体的・対話的で
深い学び」の
実現に向けた授業実践

学習指導案例と指導のポイント

vol.2 鑑賞編

移行期の指導に当たって

新学習指導要領で押さえないポイント	4
新学習指導要領の全部又は一部を実施できる	4
学習評価は現行の観点で進める	5

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業実践

鑑賞編

「鑑賞」に関する音楽科改訂の趣旨及び要点	6
「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業実践	8

学習指導案例 と 指導のポイント

1. 題材名	10
2. 学習指導要領の指導事項	10
3. 題材の目標	10
4. 教材について	10
5. 題材の評価規準	12
6. 指導と評価の計画(全2時間)	12
ワークシート例	18

「移行期用資料」発行予定

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業実践
学習指導案例と指導のポイント

- vol.1 我が国の伝統的な歌唱編
- vol.2 鑑賞編(本書)
- vol.3 創作編
- vol.4 器楽編
- vol.5 歌唱編

令和元年度中に順次発行予定(発行順が変更になる場合があります)

移行期の指導に当たって

新学習指導要領で押さえないポイント

平成29年に告示された新学習指導要領において、音楽科の目標は次のように示された。

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 曲想と音楽の構造や背景などとの関わり及び音楽の多様性について理解するとともに、創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。
- (2) 音楽表現を創意工夫することや、音楽のよさや美しさを味わって聴くことができるようにする。
- (3) 音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情を育むとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽に親しんでいく態度を養い、豊かな情操を培う。

音楽科で育成を目指す資質・能力が「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力」と規定され、そうした資質・能力の育成を目指すために「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に沿った目標が示された。それによって、生徒が教科としての音楽を学ぶ意味が一層明確になった。学年の目標についても、教科の目標の構造に合わせて、三つの柱で整理された。

また、内容構成については従来と同様に、「A 表現」「B 鑑賞」及び「共通事項」で構成された。指導する内容自体について大きな変更はなかったものの、「思考力、判断力、表現力等」「知識」「技能」のそれぞれの資質・能力に対応するように構成され、それによって、指導すべき内容が一層明確になっている。移行期においては、これらの点をきちんと踏まえながら、自らの授業について振り返り、指導の改善を図っていく必要がある。

新学習指導要領の全部又は一部を実施できる

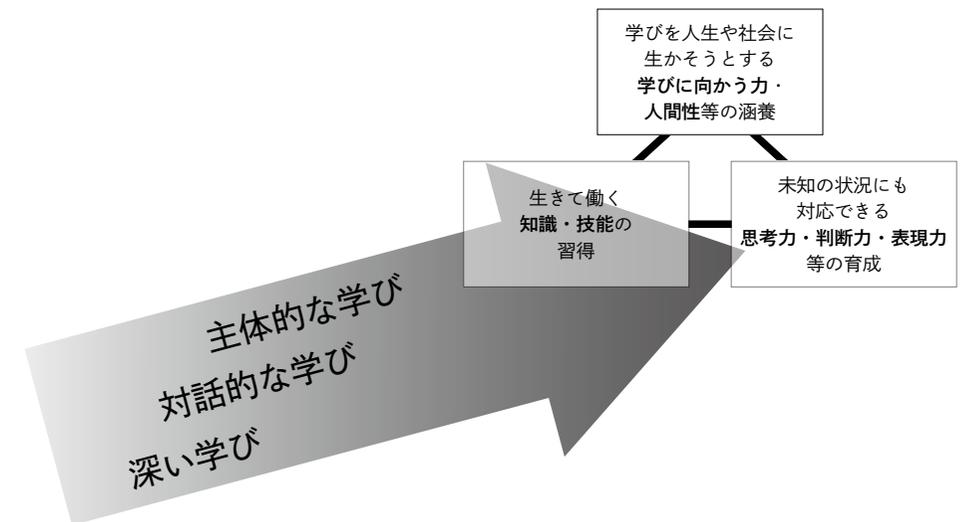
中学校においては平成30年度～令和2年度が移行期に当たり、音楽科の指導に当たっては、

現行中学校学習指導要領第2章第5節の規定にかかわらず、その全部又は一部について新中学校学習指導要領第2章第5節の規定によることができる。

(文部科学省告示第九十四号)

としている。

新学習指導要領の基本方針や趣旨を踏まえた授業改善を計画的、段階的に進めながら、授業の内容を考えていくことが重要である。特に音楽科においては、指導する内容については現行学習指導要領からの変更がほぼなく、学年度の学習すべき内容に支障を来さないため、容易に移行することが可能であるといえる。現行の教科書を使いながら「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に取り組むようにしたい。



学習評価は現行の観点で進める

移行期における学習評価については、新学習指導要領の内容で指導しても、現行の評価規準の観点をを用いることに留意する必要がある。ただし、新学習指導要領が全面実施される令和3年度からは「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点で評価する方向で検討が進んでいる。その点も視野に入れておくことが大切である。

「主体的・対話的で深い学び」の 実現に向けた授業実践 鑑賞編

「鑑賞」に関する音楽科改訂の趣旨及び要点

中央教育審議会答申において、「生活や社会における音や音楽の働き、音楽文化についての関心や理解を深めていくことについては、更なる充実が求められる」とされたことを踏まえて、次のように改訂された。

「B鑑賞」に、「生活や社会における音楽の意味や役割」、「音楽表現の共通性や固有性」について考えることを事項として示した。

中学校学習指導要領(平成29年告示) 解説「音楽編」(以下「解説」) p.7

また、鑑賞領域の内容について、次のように解説されている。

鑑賞領域の学習では、曲想と音楽の構造との関わり、音楽の特徴とその背景となる文化や歴史などとの関わり、音楽の特徴から生まれる音楽の多様性などについて理解すること、批評などの活動を通して曲や演奏を評価したり、生活や社会における音楽の意味や役割などについて考えたりすること、これらが相互に関連し合うことが大切である。なお、これらの学習を支えるものとして〔共通事項〕が位置付けられる。

「解説」p.28

このような学習を行うための鑑賞領域の指導内容は、①音楽の素材としての音、②音楽の構造、③音楽によって喚起されるイメージや感情、④音楽の鑑賞における批評、⑤音楽の背景となる文化や歴史など、の五つの観点から捉えている。この五つの観点による指導内容を具現化するため、鑑賞の指導事項が次のように示された。

「B鑑賞」(第1学年)

(1) 鑑賞の活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 鑑賞に関わる知識を得たり生かしたりしながら、次の(ア)から(ウ)までについて自分なりに考え、音楽のよさや美しさを味わって聴くこと。

(ア) 曲や演奏に対する評価とその根拠

(イ) 生活や社会における音楽の意味や役割

(ウ) 音楽表現の共通性や固有性

イ 次の(ア)から(ウ)までについて理解すること。

(ア) 曲想と音楽の構造との関わり

(イ) 音楽の特徴とその背景となる文化や歴史、他の芸術との関わり

(ウ) 我が国や郷土の伝統音楽及びアジア地域の諸民族の音楽の特徴と、その特徴から生まれる音楽の多様性

「解説」p.56

※1…第2,3学年では「考え」

※2…第2,3学年では「諸外国の様々な音楽」

事項アが「思考力、判断力、表現力等」に関する資質・能力、事項イが「知識」に関する資質・能力となり、それぞれの資質・能力を〔共通事項〕と併せて育てていくことが指導のねらいとなる。

「ア(ア)曲や演奏に対する評価」とは、曲や演奏のよさや美しさなどについて自ら考え、その価値を判断することである。また、その根拠には、曲想と音楽の構造との関わりなど、イに示す知識に関する内容が含まれることが大切である。

「ア(イ)生活や社会における音楽の意味や役割」とは、教材として取り扱う音楽が、人々の暮らしの中で、また、集団の組織的な営みの中で、どのような価値をもち、どのような役割を果たしてきたかということである。

「ア(ウ)音楽表現の共通性や固有性」とは、様々な音楽が、どのようにつくられているか、どのように演奏されているかについて、複数の音楽に共通して見られる表現上の特徴、あるいは、ある音楽だけに見られる表現上の特徴などのことである。

鑑賞の学習は、アの(ア)(イ)(ウ)のうち一つ以上、イの(ア)(イ)(ウ)のうち一つ以上の各事項を組み合わせた題材を設定して行うこととなる。

鑑賞の指導においては、生徒一人一人が音楽を自分なりに評価する活動と、評価した内容を他者に言葉で説明したり、他者と共に批評したりする活動を取り入れることによって、学習の充実を図ることが求められている。生徒が音楽に関する言葉を用いて、音楽によって喚起されたイメージや感情、音楽表現に対する思いや意図などを相互に伝え合う活動を取り入れることによって、結果として、音や音楽によるコミュニケーションが一層充実するように配慮することが大切であり、以下のように配慮事項として示されている。

イ 音楽によって喚起された自己のイメージや感情、音楽表現に対する思いや意図、音楽に対する評価などを伝え合い共感するなど、音や音楽及び言葉によるコミュニケーションを図り、音楽科の特質に応じた言語活動を適切に位置付けられるよう指導を工夫すること。

「解説」p.100

言葉で説明したり批評したりする活動によって自らの音楽活動が充実するというのを、生徒が実感し理解することが重要である。これらの活動の楽しさや意義を実感しながら学習できるような指導の工夫が求められる。

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業実践

音楽科の学習においては、心と身体を使って音楽を感じ取る体験や、他者との関わりを通して音楽のよさや価値を実感する活動が重視されている。そして、これらの学習指導を充実させるためには、「アクティブ・ラーニング」の趣旨を盛り込んだ「主体的・対話的で深い学び」の視点に立ち、学習活動と学びとの関連性や、学習活動を通して何が身に付いたかという観点で授業改善をすることが重要になる。

p.10からは、左(偶数)ページに「学習指導案例」を、右(奇数)ページには「指導のポイント」として、「授業のポイント」や「主体的・対話的で深い学びのための授業改善の視点」などを示す。

学習指導案例

↓

指導のポイント

↓

学習指導案例

1. 題材名
曲の構成と音型による曲の展開(楽譜) 第2学年

本事例は、ベートーヴェン作曲「交響曲第5番(短調)第1楽章」を題材とした鑑賞の題材である。学習指導案例の内容は、「B鑑賞(1)鑑賞の事項(A)」、「イ(A)」、「共通事項(1)イ」の音楽を形づくっている要素のうち、音色、リズム、旋律、形式、構成、「共通事項(1)イ」の用語や記号などについて、講義、動画、フェルマータを使う。

2. 学習指導要領の指導事項
ア(ア) 曲や演奏に対する評価とその根拠について考え、音楽のよさや美しさを味わって聴くこと。
イ(ア) 曲想と音楽の構成との関わりについて理解すること。

3. 題材の目標
(1) 交響曲第5番(短調)第1楽章の曲想と音楽の構成との関わりについて理解する。(知識)
(2) 交響曲第5番(短調)第1楽章の音色、リズム、旋律、構成を知覚し、それらの働きがもたらす特質や雰囲気を感じ取ることができ、知覚したことを感じ取ることの関わりについて考え、曲や演奏に対する評価とその根拠について考え、音楽のよさや美しさを味わって聴く。(思考力、判断力、表現力等)
(3) 曲の構成と曲想の関わりをもち、音楽活動をしながら主体的・協力的に鑑賞の学習活動に取り組む。(学びの姿勢)イ、人間性等)

4. 教材について
ベートーヴェン作曲「交響曲第5番(短調)第1楽章」
ベートーヴェン作曲「交響曲第5番(短調)第1楽章」は、1808年、ベートーヴェンが37歳のときに完成した。巧みな主題展開や構成力において優れたパワフルな音楽が見られ、交響曲の代表作として位置づけられている。第1楽章は、「このように運命は目を伏せなく」で有名な冒頭の動機を使用した「短調の第1楽章」と、第2楽章の第3楽章によって構成されており、ソナタ形式である。コードが通常より拡大されているという特徴があり、曲調がどのように変化、展開していくかという点を予備より、よさや美しさを味わわせたいと考え、第2学年生にとって、曲想と音楽の構成との関わりを捉えながら楽音の魅力及びオーケストラ音楽の魅力に感じることが出来る音楽である。

指導のポイント

題材名については、音楽科の指導内容を踏まえて、この題材で学習する内容の一言で分かるようなものとする。

音楽を形づくっている要素については、その題材の学習において適切なものを、学校や生徒の実態に応じて全ての生徒が身に付けるべき事項として取り上げることが望ましい。

指導事項を組み分けると、「曲想と音楽の構成との関わりについて理解すること」に、曲や演奏に対する評価とその根拠について考え、音楽のよさや美しさを味わって聴くこと」という指導内容となる。
これは、従来の指導事項では、「音楽を形づくっている要素や構成と曲想とのかかわりを理解して聴き、構構をもって聴評するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと」という別個の指導内容となる。

題材の目標については、上記のように構成する三つの要素「能力別に示すことで、題材の理解構成上の要素が明確になる形式がある。当該に身に付けさせたい「鑑賞」能力が具体的に示すことで、指導の観点の分りやすさ。なお、下記のように一文で示すことも考えられる。
「交響曲第5番(短調)第1楽章の曲想と音楽の構成との関わりについて理解すること」に、曲や演奏に対する評価とその根拠について考え、音楽のよさや美しさを味わって聴く。

内容の動機と展開上の指導事項では、次のように示されている。

(8) 各学年の「鑑賞」の指導にあたっては、次のとおり取り扱うこと。
ア 鑑賞教材は、我が国や世界の伝統音楽を身に覚え及び理解の確かな音楽のうち、指導のねらいに照らして適切なものを取り扱うこと。
「解説」p.115

なぜ題材がこの教材を選んだのかについて、当該の課題を踏まえてから選定・教材を指定するに最も適切な教材であることを理由を示し、選定した理由や教材を選んだ理由、授業を展開することが重要である。

種を解説して行う学習を期待して行うこと。
①題材の選定に本教材は、題材の選定や展開の具体的な根拠を具体的に示したり、1単位時間の授業における目標や評価すべき事項を具体的に示したりしながら、当該が何ができるようになるか(何を身に付けたいか)を明確にすることが大切である。

1. 題材名

曲の構成に注目して曲想の変化を味わおう(鑑賞) 第2学年

本事例は、ベートーヴェン作曲「交響曲第5番ハ短調第1楽章」を教材とした鑑賞の題材である。学習指導要領の内容は、「B鑑賞」(1)鑑賞の事項ア(ア),イ(ア),[共通事項](1)アの音楽を形づくっている要素のうち、音色、リズム、旋律、形式、構成,[共通事項](1)イの用語や記号などのうち、調、動機、フェルマータを扱う。

題材名については、音楽科の指導内容を踏まえて、この題材で学習する内容が一目で分かるようなものにできるとよい。

音楽を形づくっている要素については、その題材の学習において適切なものを、学校や生徒の実態に応じて全ての生徒が身に付けるべき事項として取り上げることが望ましい。

2. 学習指導要領の指導事項

ア(ア) 曲や演奏に対する評価とその根拠について考え、音楽のよさや美しさを味わって聴くこと。

イ(ア) 曲想と音楽の構造との関わりについて理解すること。

指導事項を組み合わせると、「曲想と音楽の構造との関わりについて理解するとともに、曲や演奏に対する評価とその根拠について考え、音楽のよさや美しさを味わって聴くこと」という指導内容となる。

これは、従前の指導事項では、「音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを理解して聴き、根拠をもって批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと」と同様の指導内容となる。

3. 題材の目標

- (1)「交響曲第5番ハ短調第1楽章」の曲想と音楽の構造との関わりについて理解する。(知識)
- (2)「交響曲第5番ハ短調第1楽章」の音色、リズム、旋律、形式、構成を知覚し、それらの動きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えるとともに、曲や演奏に対する評価とその根拠について考え、音楽のよさや美しさを味わって聴く。(思考力、判断力、表現力等)
- (3)曲の構成と曲想の変化に関心をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に鑑賞の学習活動に取り組む。(学びに向かう力、人間性等)

題材の目標については、左記のように育成する三つの資質・能力別に示すことで、題材の評価規準との関連が明確になる利点がある。生徒に身に付けさせたい資質・能力が具体的になることで、指導の観点が分かりやすい。

なお、下記のように一文で示すことも考えられる。「交響曲第5番ハ短調第1楽章」の曲想と音楽の構造との関わりについて理解するとともに、曲や演奏に対する評価とその根拠について考え、音楽のよさや美しさを味わって聴く。

4. 教材について

「交響曲第5番ハ短調第1楽章」 ベートーヴェン 作曲

ベートーヴェン作曲「交響曲第5番ハ短調」は、1808年、ベートーヴェンが38歳になる年に完成した。巧みな主題展開や構成力において優れたバランス感覚が見られ、交響曲の代表作として位置付けられている。第1楽章は、「このように運命は扉をたたく」で有名な冒頭の動機を使用したハ短調の第1主題と、滑らかな曲想の第2主題によって構成されており、ソナタ形式ではあるが、コーダが通常より拡大されているという特徴がある。動機がどのように変化、発展していくかということを手掛かりに、よさや美しさを味わわせたいと考え選択した。中学2年生にとって、曲想と音楽の構造との関わりを捉えながら楽曲の魅力及びオーケストラ音楽の魅力に迫ることができる音楽である。

内容の取扱いと指導上の配慮事項では、次のように示されている。

(8)各学年の「B鑑賞」の指導に当たっては、次のとおり取り扱うこと。
ア 鑑賞教材は、我が国や郷土の伝統音楽を含む我が国及び諸外国の様々な音楽のうち、指導のねらいに照らして適切なものを取り扱うこと。

「解説」p.115

なぜ本題材でこの教材を選択したのかについて、生徒の実態を踏まえながら資質・能力を育成するために最適な教材であることの理由を示し、選択した意図や意味を考えながら、授業を展開することが重要である。

5. 題材の評価規準

	音楽への関心・意欲・態度	鑑賞の能力
題材の評価規準	曲の構成と曲想の変化に関心をもち、鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。	「交響曲第5番 ハ短調 第1楽章」の音色、リズム、旋律、形式、構成を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、曲想と音楽の構造との関わりについて理解するとともに、曲や演奏に対する評価とその根拠について考え、音楽のよさや美しさを味わって聴いている。

中学校の学習指導要領が全面实施される令和3年度からは、以下の3観点で評価する。

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
題材の評価規準	「交響曲第5番 ハ短調 第1楽章」の曲想と音楽の構造との関わりについて理解している。	「交響曲第5番 ハ短調 第1楽章」の音色、リズム、旋律、形式、構成を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えるとともに、曲や演奏に対する評価とその根拠について考え、音楽のよさや美しさを味わって聴いている。	曲の構成と曲想の変化に関心をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。

6. 指導と評価の計画(全2時間) ※評価規準と評価方法については省略

時	◆ねらい ●学習内容 ・学習活動	○指導上の留意点
1	<p>◆「交響曲第5番 ハ短調 第1楽章」の曲想と音楽の構造との関わりについて理解する。</p> <p>●本題材の見通しをもち、楽曲に関心をもち。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本題材では「交響曲第5番 ハ短調 第1楽章」のよさを味わって自分の意見をもてるように学習していくことを知る。 ・第1主題を聴き、楽曲や作曲者について知っていることを述べ合う。 ・楽器に着目して第1主題を聴き、オーケストラで演奏されていることを知り、オーケストラの楽器を確認する。 ・作曲者について教科書などを参照して知る。 	<p>○なぜ「交響曲第5番 ハ短調」がこれほど有名になり繰り返し演奏され聴かれてきたのか、その理由をこの授業によって分かり、自分もそのよさを味わえるのだという期待と見通しを、題材の始まりにもたせる。</p> <p>○楽曲や作曲者について、生徒が知っていることを自由に述べ合うことで、これからの学習や楽曲に対する学級全体の関心を高めさせる。</p> <p>○弦楽器、木管楽器、金管楽器、打楽器の音色について、オーケストラの各楽器の音色が分かるような映像等も活用して確認させる。</p>

主体的・対話的で深い学びのための授業改善の視点

☆【主体的な学びを実現する視点】

- 「主体的な学び」とは、学ぶことに興味や関心をもち、生徒自ら学習活動を見通し、振り返り、課題を解決していこうとする学びのことである。
- 題材の最初に本題材と前題材との関連や学年間の系統的な接続を具体的に示したり、1単位時間の授業における目標や目指すべき姿を具体的に示したりしながら、生徒が何ができるようになればよいか(何を身に付ければよいか)を明確にすることが大切である。

●曲想と音色（オーケストラの響き）、リズム（動機）、旋律（動機、主題、ハ短調）、形式（ソナタ形式）、構成（動機や主題の反復や変化）との関わりについて理解する。

・動機（譜例1）のリズムを手で打つなどして、冒頭の動機について理解する。

【譜例1】



・動機に着目して第1主題を聴き、動機がどのように現れたかについて意見を述べ合う。

・第1主題の曲想と動機について、聴き取ったことや感じ取ったことをワークシートに記入する。

○単に「動機」などの用語を覚えるだけの学習にならないよう、実感を伴って理解させる。

○第1主題では、動機が音の高さを変えて反復して現れることを、音楽を聴いて確認させる。

○楽器の音色や調性にも注目させる。

・曲想の変化に着目して第2主題を聴く。

・動機に着目して第2主題を聴き、動機がどのように現れたかについて意見を述べ合う。

○旋律の動きや調性に注目させる。

○第2主題では、動機の音型が上行に変わって現れることを、音楽を聴いて確認させる。

【譜例2】



・第2主題の曲想と動機について、聴き取ったことや感じ取ったことをワークシートに記入する。

○楽器の音色にも注目させる。

・提示部、展開部、再現部、コーダという「ソナタ形式」について理解し、各部分を区切って聴いて、それぞれの曲想や気付いたことについてワークシートに記入する。

・「ソナタ形式」に着目して、第1楽章を通して鑑賞する。

○「ソナタ形式」については教科書などを参照する。

○第2時のグループ活動で考えを広げたり深めたりできるよう、第1時のまとめとして個人の考えをしっかりとさせる。

○第1楽章全体を通して鑑賞することで、ソナタ形式という構成の面白さに気付かせる。

授業のポイント①

○「知識」の習得に関わる、曲想と音楽の構造との関わりを理解することが学習内容に設定されている。ここでは、[共通事項]と関わらせた指導によって、生徒が曲想を感じ取り、感じ取った理由を、音楽の構造の視点から自分自身で捉えていく過程が必要である。具体的には、音色（オーケストラの響き）、リズム（動機）、旋律（動機、主題、ハ短調）、形式（ソナタ形式）、構成（動機や主題の反復や変化）などを扱う。この活動が、「交響曲第5番 ハ短調 第1楽章」の価値を判断する生徒の思考を促し、音楽のよさや美しさを味わって聴く学習の深まりにつながっていく。

授業のポイント②

○鑑賞の授業においても、実感を伴いながら理解することが大切である。そのため、体を動かす活動を適宜取り入れるとよい。

- ・動機が現れたら手を挙げる。
- ・動機の動き（上行、下行など）を手で表す。

授業のポイント③

○鑑賞の言語活動においては、言葉で説明し合うことを通して、様々な感じ取り方があることに気付くことができるが、その際、言葉のやり取りに終始することなく、実際に動機を聴き返すなどして、言葉で表したことと音や音楽との関わりが捉えられるようにすることが大切である。常に音楽と関わらせた丁寧な指導を心掛けたい。

※ワークシート例→p.18

教師の発問例



第1主題と比べて、第2主題はどんな感じがするかな？

音楽がどのように変化したことで、そう感じるのかな？



◆「交響曲第5番 ハ短調 第1楽章」の音色、リズム、旋律、形式、構成を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えるとともに、曲や演奏に対する評価とその根拠について考え、音楽のよさや美しさを味わって聴く。

●「交響曲第5番 ハ短調 第1楽章」の音色、リズム、旋律、形式、構成を知覚・感受しながら、曲や演奏に対する評価とその根拠について考え、音楽のよさや美しさを味わって聴く。

・第1楽章を提示部、展開部、再現部、コーダに区切って聴き、前時の学習内容を振り返る。

・「展開部」「再現部」「コーダ」の3グループに分かれ、担当する部分を聴きながら、曲想と音楽の構造との関わりについてグループで意見を出し合う。

・グループの意見を整理してまとめ、「展開部」「再現部」「コーダ」の順に、各部分の曲想と音楽の構造との関わりについて学級全体に発表して共有する。

・各グループの発表を参考に、ソナタ形式を意識して第1楽章を通して聴き、「交響曲第5番 ハ短調 第1楽章」に対する評価とその根拠について考えたことを批評文にまとめる。

・批評文を発表し合い、音楽のよさや美しさについて学級全体で共有する。

○前時のワークシートを見ながら、動機や曲想の変化について学習したことを思い出す。

○学級の生活班をベースにグループ分けをしてもよい。

○グループごとに音源(担当する部分だけを収録したもの)を用意し、すぐに聴いて確認できるような環境をつくる。

○ワークシートに記入した自分の意見を互いに発表し合うだけでなく、グループで音楽を聴きながら曲想と音楽の構造との関わりについて更に追求する。

○話し合いだけに終始しないよう、教師は各グループに注意を払う。

○グループの意見と音楽とが結びつくよう、発表中あるいは発表直後に、音楽を聴いて学級全体で確認する時間をつくる。

○ここでいう「評価」とは、曲や演奏のよさや美しさなどについて自ら考え、その価値を判断することである。「その根拠」には、曲想と音楽の構造との関わりといった知識に関する内容(理解したことや捉えた特徴など)が含まれることが大切である。

授業のポイント④

○「思考力、判断力、表現力等」の育成に関わる、曲や演奏に対する評価とその根拠について考え、音楽のよさや美しさを味わって聴くことが学習内容に設定されている。ここでは、音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えることが必要である。そのため、本時においてはグループに分かれ、担当する部分を聴きながら、曲想と音楽の構造との関わりについて意見を出し合ってまとめ、グループの意見を学級全体に発表して共有する活動を設定した。

主体的・対話的で深い学びのための授業改善の視点

☆【対話的な学びを実現する視点】

○「対話的な学び」とは、学習活動を通して他者と協働することによって、多様な見方・考え方を学ぶことである。客観的な根拠を基に他者と交流し、自分なりの考え方をもったり音楽に対する価値意識を更新したり広げたりしていくことが重要である。対話的な学びの一つの手段として、左記のような方法を取り入れることも考えられるが、授業で取り入れるときには、生徒が自分の担当部分だけでなく全体の見通しをもてるよう、配慮する必要がある。

○ここでは、提示部、展開部、再現部、コーダの動機や曲想の変化について、第1時に個人で考えたことをグループ内で発表し合い、グループで音楽を聴きながら曲想と音楽の構造との関わりについて更に意見を出し合い、学級全体に発表して共有する。その際、言葉での説明だけでなく必ず音楽も聴き、生徒が実感をもって曲全体を理解できるようにすることが大切である。この活動を通して、生徒は多様な見方・考え方を学び、自分なりの考え方をもったり音楽に対する価値意識を更新したり広げたりしていく。

主体的・対話的で深い学びのための授業改善の視点

☆【深い学びを実現する視点】

○「深い学び」とは、「音楽的な見方・考え方」を働かせて自分自身の課題を見つけ、思いや考えを基に豊かに意味や価値を創造していくことである。

○「深い学び」の鍵となるのが、「音楽的な見方・考え方」である。「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けること」を、習得・活用・探究という学びの過程の中で働かせることを通じて、より質の高い深い学びにつなげられるようにする。

○自分なりの考えをもつとともに、自分とは異なる他者の考えにも耳を傾けるなどして、他者との関わりの中から自分の価値意識を再確認し、自分としての考えを一層深めていくようにすることが大切である。

教師の発問・指導例



「交響曲第5番 ハ短調 第1楽章」のよさについて、自分の考えとその理由を書こう。

「動機」をキーワードにして書いてみよう。



本社 〒171-0051 東京都豊島区长崎1-12-15
TEL:03-3957-1175 FAX:03-3957-1174 (代表)

中部支社 〒460-0024 名古屋市中区正木4-8-7 れんが橋ビル8F
TEL:052-678-3151 FAX:052-678-3153

関西支社 〒540-0003 大阪市中央区森ノ宮中央1-14-17-601
TEL:06-6943-7245 FAX:06-6920-2170

西部支社 〒751-0808 下関市一の宮本町2-7-14
TEL:083-256-4747 FAX:083-256-1010

2019年10月発行 49078